

# 淡青

## 特集 社会の中の東京大学

[総長対談] ゲスト **崔 相龍** 駐日大韓民国大使

[教育・研究の現場から] 東京大学附属図書館／大学院工学系研究科・工学部

[世界の中の東京大学] 東南アジア生物資源開発研究の拠点としてのボゴール基地

[サイエンスへの招待] 半導体デバイスの開発からナノアーキテクトへ [キャンパス散歩] 東大の講堂と卒業式

東京大学広報誌

TANSEI

February, 2001

4



# 淡青

「淡青」について  
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

『淡青』4号をお届けします。本号の総長対談は、本学大学院を修了し、現在は駐日大韓民国大使としてご活躍されている崔相龍氏をゲストにお迎えいたしました。新しい世紀にはいり、アジアというキーワードのもつ意味がますます重要性を増すなか、アジアの知を世界に向けて発信する意義について、蓮實重彦総長と存分に話していただきました。

特集は「社会の中の東京大学」です。本学が行っている、社会と向き合うさまざまな活動の一端を紹介する企画です。その対象は地域、世界、産業界、次世代とさまざまです。環境創造という視点からの試みもとりあげました。さらに、ユニークな活動をなさっている3名の卒業生に、それぞれの体験に基づき本学をどうみておられるかをインタビューいたしました。

「教育・研究の現場から」では、附属図書館と大学院工学系研究科・工学部の紹介、「世界の中の東京大学」では、インドネシア・ポゴールの海外拠点の紹介、そして「サイエンスへの招待」では生産技術研究所の榊裕之教授に登場いただきました。「キャンパス散歩」では、本学の講堂をとりあげています。

創刊号を発刊して以来、学内外の多くの皆様からご意見や励ましの言葉をいただき、内容を徐々に充実させることができたこと感謝しております。次号からは新しい編集スタッフに引き継がれますが、皆様のさらなるご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(東京大学広報委員長 大塚柳太郎)

## 総長対談

ゲスト

## 崔相龍

駐日大韓民国大使

# アジアからのメッセージ

韓国、日本をはじめとするアジアの知識人が連帯して、その潜在能力を発揮すれば、発信されるメッセージは非常に大きい。崔相龍駐日大韓民国大使をお迎えして語っていただく、新しい世紀の課題、アジア的な知性の協力とは。



### 崔相龍

Choi Sang-yong

一九六四年、ソウル大学校文理科大学外文学科卒業。  
一九七一年、東京大学から法学博士の学位を取得後、  
ハーヴァード大学客員教授、高麗大学校政経大学教授、  
亜細亜問題研究所長を歴任。この間、韓国政治学会会長、  
韓国平和学会会長、韓日文化交流委員会副委員長を務め、  
二〇〇〇年より在日大韓民国特命全權大使。



### 蓮實重彦

Shigeniko Hasumi

一九六〇年、東京大学文学部卒業。  
大学院人文科学研究科に進むとともに、留学したパリ大学から一九六五年に博士を授与される。帰国後、立教大学を経て一九七〇年から本学教養学部、一九九三年、教養学部長。一九九五年、東京大学副学長。  
一九九七年、東京大学総長。

蓮實 本日はお忙しいところをお越しいただき、ありがとうございます。

東京大学で博士号をとられた方が韓国大使として着任されたことは、私にとって大変な名誉で、日韓両国にとって素晴らしいことです。ところで、崔大使が東京大学にいらしたのはいつごろだったのでしょうか。

崔 一九六五年から一九七二年の九月まででありました。たしか、一九六六年三月から外国人研究生として半年ぐらい受験勉強をし、その年の九月に国際政治学を専攻する修士課程にはいりました。当時の主任教授は坂本義和先生でした。その後、博士課程に進み、一九七二年七月に法学博士号を

いただきました。今度、大使として日本に赴任してから確認した話ですけれども、東京大学で国際政治学分野の博士としてははじめてだったそうですね。

蓮實 政治学を専攻なさったのは、どういうきっかけですか。

崔 私は一九四二年の生まれですが、四歳くらいからのことを覚えていますが。世界的な規模での冷戦は、一九四七年三月のトルーマン・ドクトリンからはじまったのですが、その前から韓半島では厳しい冷戦がはじまっています。私は慶州の生まれです。私の村では、夜はバルチザンの青年たちが革命歌を歌う一方、昼は警察がきて共産党を

示す「共匪」を鎮圧していました。人が殺されたこともあり、村は本当に血だらけでした。その記憶は非常に強烈でした。植民地、占領、分断、左右の戦い、これらが慶州での小学生から高校生までの体験でした。

ソウル大学にはいったのが、四・一九学生革命の年です。私は学生のデモに加わり、そのグループのメンバーとして活動しました。幼いときの体験、大きさに言えば冷戦体験といいますが、それが大きかったのです。ソウル大学の学生になってからは、左右の対立や分断の原因を探り、それをどう解決したらいいか、実践的な問題意識をもつようになりました。

現代史では、大韓民国は一九四八年八月からはじまるとなっていますが、その前の一九四五年から一九四八年の占領期間は歴史の空白期で、教科書にも載っていませんでした。日本は当時マッカーサーの占領下です。私が学生のころの韓国の政治の悲劇を理解するには、分断の原因、分断直後の占領政治を探らなければなりません。その悲劇をどう説明し、どう解決したらいいかという問題意識からです。そのためには、アメリカ留学はあまり適当ではありませんでした。一九六〇年代も、アメリカにはマッカーシズムの後遺症みたいなものが、少なくとも知的な雰囲気としてあったからです。日本は同じ占領期を経験しているから、占領体制の比較研究もできるので留学先として最適だと考えました。

蓮實 戦後、日本はアメリカのデモクラシーを輸入しました。しかし、すでに一九四八年以前からマッカーシズムがアメリカ社会を深刻な危機に陥し入れていたという負の局面は、当時の日本ではあまり話題になっておりませんでした。大使はそれを敏感にお感じになっていたのでですか。

崔 そう思います。私は、アメリカによる日本の占領は、占領政策の成功例にはいると考えています。外圧ともいえるわけですが、外圧と民主主義





懐徳館にて

### 三〇パーセントのエリート

運實 大使が東大ご在学のころは、丸山眞男先生をはじめとして、戦後民主主義の担い手が多くいらした時代ですね。こうした方々を見て、大使は何かそこに矛盾をお感じになりませんでしたか。

崔 これは印象でしかありませんが、一九六五年以来の約三五年間、あらゆる分野のリーダーや市民と交流を深め、その結果、日本の市民のなかには、おおざっぱにいえば三〇パーセントくらいは、おおざっぱに感じると感じようになりました。そのインテリの世界に限ってみれば、本当に多様性にあふれた国だと思います。コスモポリタンもいれば、天皇制批判者もいれば、コミュニストもいる。ディレッタントもいる。とくにわれわれとの関係でいうと、歴史認識の面では韓国人以上に厳しいというか、日本の保守基調にきわめて批判的な人もいます。

その一方で、残りの七〇パーセントが非常に日本的だと私は思います。どちらかというと、丸山先生もやはり三〇パーセントのなかの一人ではなかったでしょうか。日本のメイン・ストリームは、良かれ悪しかれ保守基調で、日本の伝統を守ろうとし国家を中心に物事を考えます。丸山先生は、西洋の概念で日本を解釈し説明したのですけれども、やはり限界がある。おそらく先生も、後期にはその限界を自覚されたのではないのでしょうか。運實 なるほど。私も丸山先生に対してある意味ではアンビヴァレントです。先生がおっしゃることは正しいとしても、それで日本が本当に変わるのだからかという感じをもってありました。ところで、東大では、その三〇パーセントのエリートをつくれればいい、七〇パーセントを動かさうとするよりは、七〇パーセントからむしろ超然と離れていたほうがいい、という考えが長く力をもっていたように思います。かつては象牙の塔といわれておりましたが、そこにこもって三〇パー

セントを相手にいい仕事をしていれればいいという考えです。しかし、この考えにしがたがいますと、現実には、象牙の塔のなかで進歩があるだけで、それを日本全体に及ぼすことはできない。いま、東大は三〇パーセントのなかに自足せず、残りの七〇パーセントにもいるいろと発信していかなければなりません。

崔 一三〇年近い歴史のなかで、東大は多様なリーダーを輩出したのではないのでしょうか。三〇パーセントの人びともいますけれども、七〇パーセントのなかに優秀な官僚や企業で活躍する人材がいます。私が東大にいたときには、会社の役員が七〇パーセントが東大の出身者でした。出身学部は経済学部よりも、むしろ法学部が多かったと思います。その意味で、いままでも東大は広い意味でのリーダー、日本をリードする層を生産してきたと思います。

### 日本の知識人への期待

崔 私は、日本の知識人に対して強い期待をもっています。平均的な西洋の知識人による東洋、アジアの無視が怖いからです。アジアにかんする数少ない専門家は優れていますが、彼らは例外です。平均的な西洋の国民、市民だけでなく、知識人も東洋についての教養は少なすぎます。運實 それはおっしゃるとおりですね。崔 それに比べると、日本の平均的な国民、市民、知識人の西洋についての教養は優れています。幼稚園から大学院まで西洋のことを学びます。これは力です。ただし、東洋と西洋のバランスがとれた知識、教養が本物だと思っています。それを一番備えているのが日本の国民です。韓国の国民もそのなかにはいるかもしれませんが。

総長がお考えになっている、日本・韓国・中国の知識人をつくる「ゴールデン・トライアングル」構想は、この三つの国の知識人の使命、役割に還元すると思います。そのなかで、まず日本が東大

は共存できるのです。ところが、韓国は外圧によって分断され植民地になった。その後の三年間、「占領民主主義」の洗礼をも受けなかったのです。占領軍にはまったく準備がなく、三年間を場あたりの方針でおしました。この三年間に、左右の対立が非常に厳しくなったのです。占領政策が日本とおなじようなものでしたら、その後の韓国の民主化や議会民主主義にとって、建設的な土台になったと思っています。そうできなかった韓国の占領は、占領政策の失敗例なのです。それで、私は一九七九年から二年間、ハーヴァード大学に留学し、マッカーサーの日本占領とホッジの韓国占領の比較を研究テーマにしました。運實 戦後の日本の指導者には戦前の官僚が多いわけです。吉田首相は元外務官僚です。戦前の官僚組織のなから日本の戦後の政治家たちがでてきたことを、大使はどう思われますか。崔 これはあくまで一研究者としての見解ですが、天皇制官僚の連続性が日本の自立的な民主化の障害になったと思います。

運實 日本国民は、そのような矛盾を自らの手で解消しなかった。たとえば、岸信介のような政治家が戦後も生き延びられ首相にさえなったような、融通無碍というか、そういう矛盾を残しながらも、大使はなお占領政策は成功だったとお考えになりますか。崔 はい。ともうしますのも、明治以降の日本の歴史を振り返ると、日本国民自らが民主主義を奪い取ったことはなかったと思うからです。明治維新も revolution ではなくて restoration です。日本流の対応の仕方なのです。見方によって評価は変わりますが、戦後の改革もその延長線で外圧によるものでした。しかし、その中身は質がよかったのではないかと思っています。占領と民主主義の共存という意味で、私は相対的に成功だったと判断しています。

アジア再認識の知的な主体になってほしい。荒っぽい表現ですけども、民主主義と市場経済、それから東洋の教養をもっている知識人は日本人と韓国人です。両国の知識人が連帯して、その潜在能力を発揮すれば、発信されるメッセージは非常に大きいと思います。運實 私もまったく同感です。今までも日本人が韓国を研究する、韓国人が日本を研究することはあったのですが、もう一つ新しい視点として、日本人と韓国人が力を合わせてヨーロッパ、アメリカを見ることも必要だと思っています。相互理解はお互いを学びあうだけでなく、第三者を見る目からもつくりだされると思っており、そのために私はいくつかの企画を行ってまいりました。

中国でも、だいたい三五歳ぐらいまでの若い人たちは自由にものを考えていますが、まだそれが公式の声になっていない。中国に潜在力のある人たちがいることはまちがいないので、韓国と日本と中国の潜在的な力をもった人たちが集まれば、大きな学術的な力が生まれると思うのです。崔 たとえば、東アジアに住む私たちが慣れ親しんできた、人間関係や政治関係にかかわる規範の一つに「中庸」があります。これは非常に独創的な考え方ではないでしょうか。日本人は「中庸」に慣れ、これを空気にように思う雰囲気がありますが、「中庸」はたんなる真ん中ではなく、非常に意識的で自覚的でダイナミックな規範だと思っています。

運實 何かを生み出していくものなのですね。崔 そうです。孔子の「時中」は素晴らしい言葉です。「中庸」すなわち「時中」です。「この「時」はたんなるタイムではなくて、要するに「コンディション」です。いろいろな状況、条件によって「中」の意味がちがうという意味での「時中」なのです。これと同じことをアリストテレスは、「mean related to us」と言いました。「この us は当時の都市国家の市民です。mean はたんなる mean では





なくて、人間関係にかかわっていません。その人間関係によって、meanの意味がちがう。それは中庸のダイナミズムそのものです。非常に動的な均衡ですね。国境、歴史を越えて、人類が体験、実践によって積み重ねてきた一つの規範でありゴールデン・ルール（黄金律）です。

これは一つの例ですけれども、このように東洋と西洋の思想を比較し分析する能力のある知識人が、地球上のどこにいるかということ、繰り返しになりますが日本と韓国です。中国にもいずれてくるはずですが、西洋の知識人が見逃している面を普遍的な視点から研究し、その成果を世界に向けて発信する、そのイニシアチブを日本の知識人がとってほしい。そうすれば、韓国の知識人も中国の知識人もかならず応援にきます。

運實 世界に向けた視点をもった人たちが集まるということですね。ただ、現在のよな世界の知的状況をつくりだしたのは、日本人も韓国人も含むアジア人が、知的に怠慢であったからではないでしょうか。

崔 おっしゃるとおりです。怠慢か、あるいは鋭い問題意識がなかった。十分な知識をもっていながらも、どういう形でメッセージを送るかという問題意識の欠如もあったと思います。

運實 これからは、いいことを考えているだけでは駄目で、それをどのようなメッセージとして世界に発信するかという戦略が大事ですね。

学者は政治の決断の後にそれを意味づけることが多いのですが、私の意味づけは、文化というものは行ったり来たりしながら学びあうプロセスであり、限らない相互学習の過程である、ということです。たとえば、朱子学の面で李退溪の思想が、山崎闇斎に大きな影響を与えました。江戸時代の初期までは、むしろ韓国が影響を与える立場にあったといえます。その後、われわれは近代化、産業化について日本から学びました。文化とはこういうものです。ある特定の時点における優劣の問題ではなく、長い歴史のなかで広い視野から学び合う過程なのです。

幸いに、日本の映画『ラブレター』に一〇〇万人以上の韓国国民があつまり、韓国のアクション映画『シユリ』を日本の多くの若者が見ました。こういう若者に希望があるのです。おもしろければ文化は国境を越えますし、本当にお互いに学びあえます。

運實 金大中大統領のご英断は、非常に素晴らしいものです。

とここで、外圧ということに関して、サッカーのワールドカップを日韓両国が共同開催することを決定したことが印象的です。日本は自分たちだけで主催するつもりでしたが、国際サッカー連盟と一緒にやりなさいと言った。そうすると、それまでは絶対に自分たちでやるうと思っていた日本のサッカー連盟がくると変わったのです。第二次世界大戦後、日本の官僚たちがくると変わったのと同じことが起こったような気がしました。現在の日韓関係の良好さの背景の一つには、外圧があったと考えています。

崔 いい外圧はいいのではないですか。外圧はすべて悪いのではなく、歴史のうえで外圧と自立が矛盾しないときもあります。

運實 私はサッカーが大好きだし、私の一番好きなサッカー選手は韓国にいるのですけれども、やはりこれからは知的な面での協力を推し進めな

### 過去の記憶と生産的な未来

運實 たとえば二一世紀のことを考えるときに、日本ではしばしば二〇世紀に日本が犯してきたいくつかの問題を記憶から遠ざけようとする傾向があります。さらには、過去を捏造しようとする動きさえあります。このようなことは日本だけではなく、たとえば第二次世界大戦後のフランスにもみられました。また、一九四〇年代の終わりから一九五〇年代にかけて、アメリカが自分自身の国の知識人をどのようにひどく扱ったかにかんする記憶が、現在のアメリカ人にはないのです。

このように、過去を記憶から遠ざけることによって得られる現在の豊かさは、空疎でかならずつぶれると思うのです。ですから、大学は過去を記憶にとどめることが必要です。しかし、記憶そのものを絶対的な条件にすると、一億総懺悔というまったくつまらないことになってしまいます。記憶をとどめつつ、その記憶をいわば痛みとして感じ、それによって過去だけでなく将来の視点をつくるのが大事だと思うのです。

崔 いま、韓国と日本は国交を正常化して三五年目ですけれども、とくに二年半前の大統領訪日以来、雰囲気が非常によくなりました。何がよくなったかといえば、友人になれたことです。過去を直視し、歴史認識を共有したうえで未来を志向することを、両首脳が文書で約束したのです。

過去を清算するという話も耳にしますが、清算という言葉は、私の歴史観からつかいにくいのです。歴史において、言葉の真の意味での清算ということはあり得ません。戦争と革命さえ、過去の歴史を清算できなかったのです。歴史は、変化と連続の限らない相互作用です。しかし、けじめや区切りをつけ未来に向かっていこう、という考え方はよいと思います。

運實 生産的な未来をつくるためにですね。

崔 そうです。過去は未来の鑑です。これは日本

ればなりません。私は可能なことから始めるつもりです。東大には、今までは文学部・大学院人文社会科学研究科に朝鮮文化部門という研究施設があっただけなのですが、できれば韓国・朝鮮文化を研究する大学院の組織をつくりたい。それに、学部の一年生のときから習う韓国語の教官の数は、来年度からまちがいに増えると思います。

崔 人文系の研究組織についてですが、韓国の現在のダイナミズムを知るには、やはり政治と経済の研究をとまわらないと駄目です。それは制度的にむずかしいのでしょうか。

運實 むずかしいはありませんが、多くの部局に散在している韓国の経済や政治の研究者の組織を、すぐに制度化できるかどうかはわかりません。私は韓国だけときめないで、むしろ中国などを含めたアジア研究という枠組みができればいいと思っています。

崔 研究組織だけではなく、学生が集まる教育組織も将来考えられますか。

運實 それは当然考えています。どのような形で実現できるかは、あと数年お待ちいただきたいと思っています。

崔 とここで、あらゆる分野で日本の研究者の業績は英語に訳されているわけではないでしょう。もし英語に訳されれば、世界における日本の知識人に対する評価は非常に高くなるのではないのでしょうか。西洋人は、とくに歴史・政治・経済などの分野で日本人の研究をほとんど知らないのですから、本当にもっといいです。

もう一つ、日本では政界とか財界の人びとが、知識人をあまり評価していないように思います。私は政界や財界のリーダーと会う機会も多いのですが、知識人を優待して高く評価すべきであると訴えてまいりました。政治と学問の距離が、あまりに遠すぎたことと関係がありそうですね。

運實 いろいろとおっしゃっていたいただいたことを、私は着実に一つずつ解決していきたいと思

国内の問題ですからなかなか言いづらいのですが、教科書の問題が依然として心配されます。過去を直視するとした、二年半前の約束は守ってほしい。それが守られないと、友好関係の障害になる可能性があります。

運實 未来をつくるのに設計図をまちがえてはいけない、ということですね。

崔 そのとおりです。私はいろいろな機会に、ラウケの「歴史は書き替えができない。その意味では一つの神に通じる」という言葉を引用します。歴史は一つの神である、歴史は砂の上に書いた文字ではない、そう容易に消せない、ということですが、過去は消せないのだけれども、われわれはよい未来をつくることはできます。確認された歴史的事実を曲げたり、消したり、なくすことは、両国の友好のために、また日本のためにもよくない、もっと真摯に考えるべきなのです。

運實 過去を抹殺することは、韓国をはじめとするアジアの近隣諸国に失礼であるという姿勢もあるのですが、それ以前に人間として最低限のモラルの不在を意味していると思います。そこにさらに偏見がはいってきますと、つくりあげるべき未来の設計図が足元から崩れる。そうすると、だれの得にもならないのです。

崔 「ゴールデン・トライアングル」を創造するには、隣国からの信頼、友情がないとむずかしいと思います。

### 文化交流と相互理解

崔 二年前、韓国が日本文化に門戸を開いたのは一つの決断でした。文化はたんなる文化ではなくて、経済力をももたっています。日本の文化産業は競争力に優れ、韓国のそれとは比べものになりません。こういう状態で韓国の市場を開くと、かならず損をするという認識から、九〇パーセント以上の人びとが反対でした。でも、大統領は「いや、開こう」と決断しました。

ます。東大では重大な変革を行うのに一〇年かかるといわれています。しかし、それはいくら何でもかかり過ぎなので、私は数年で変えたいと思っています。

崔 決定が下される過程をみますと、韓国は早すぎ、日本は遅すぎる気がします。それはともかく、やはり学問分野での中国・韓国・日本の協力は非常に大きなメッセージになると思います。

運實 アジア的な知性の「ゴールデン・トライアングル」ですね。今日は本当にありがたうございました。

(二〇〇〇年二月六日、懷徳館にて)



任期の4年間で何とか務めおおせるには、絶望的な状況に置かれても楽天的な表情を装い続けるほかはない。秘書掛長の関谷孝さんは、たちどころにその戦略を理解し、いつときも笑顔をとやさず私によりそい、掛を掌握して下さいました。当初は戸惑いぎみだった秘書の飯田めぐみさんも、やがては率先して楽天主義に加担して下さいました。かくして、関谷さんは4年、飯田さんは3年もの間、総長室に虚構の明るさを行き渡らせてくれたのです。お二人のそんな無謀な努力には、ただ感謝あるのみ。(運實重彦)



# 社会の中の 東京大学

特集

とりたてて言うまでもなく、大学はすぐれて社会的な存在です。「象牙の塔」と揶揄された昔とは異なり、今日の大学は、積極的に社会と関わりを持ち、誰にでも開かれたキャンパスを実現するために大いに努力しています。社会が大学を必要としてその教育研究を支え、大学が社会を必要としてその発展に寄与する、こんな双方向のよい関係が築けるように、東京大学もまた全力を尽くしています。今回の特集では、限られたスペースではありますが、そんな努力の一端をご紹介します。また、特別企画として、一旦社会に出た卒業生に、外から見た東京大学について語ってもらいました。あらためて社会と大学の関係を考えるきっかけになれば、と思います。



現在の柏キャンパス(手前の建物が共同利用宿舎、右側の6階建て建物が宇宙線研究所、左側の建物が物性研究所)

## 地域に開く

### 柏キャンパスと柏市の相互協力関係

本郷、駒場、柏からなる東京大学の三極構造のもと、柏キャンパスが、地域に開かれたキャンパスをめざしてJ・R柏駅から直線距離で北西約五キロメートルの場所に新設されました。平成一二年四月には、まず、物性研究所と宇宙線研究所がこの新キャンパスに移転を完了し、研究教育活動を開始しました。地域に開かれたキャンパスをつくるために、大学は地域とどのような相互協力関係を作ってゆくべきなのでしょう。ある地域に住み、働く人々にとってそこに大学があることのメリットは、大学が発信する知的情報を

身近に感じる点でしょう。その意味で、大学の持つ知的財産を地域に還元していくことが最も大切ではないかと感じます。柏キャンパスとしての活動は始まったばかりですが、柏キャンパスと地域との協力関係を示すいくつかの活動を紹介しましょう。

地域との良好な相互協力関係を作るには、まず大学における研究活動を地域の方々を知っていただくことが不可欠です。このため、一月一・二日の両日、物性研究所と宇宙線研究所が一般に公開され、約二〇〇〇人の方々が施設を訪問されました。多くの方々が

二つの研究所における研究内容に興味を持って下さり、非常にうれしく思いました。また、千葉県教育委員会主催のもと、千葉県内で科学に強い興味を持つている高校生を対象に、最新の科学の紹介を行う講座が夏休みの期間に開催されました。この時には、特に柏キャンパスの外にある宇宙線研究所の施設まで、高校生に一泊がかりで来てもらいました。

専門家が柏キャンパスを拠点として研究を開始します。そのなかには、柏市及び近隣地域、あるいは地域の産業の抱えるさまざまな課題の解決のために、必要な専門知識を持った研究者もきつといるはずで、そんな研究者を通じた地域との直接的な協力を含め、柏キャンパスと柏市及び近隣地域との相互協力関係はこれからより一層緊密になっていくでしょう。

梶田隆寛(かした・たかあき) 宇宙線研究所教授

今後は、大学の方からもっと積極的にキャンパスの外に出かけて行って、研究内容を地域の方々と社会に還元していくことが重要になってくるものと思います。実はそのような試みも既に始まっています。平成一二年三月に柏市の多大な協力を得て、宇宙線研究所の研究分野の一つ、ニュートリノと呼ばれる謎の素粒子に関する一般講演会をJ・R柏駅のすぐ近くで開催したのです。この時にも、私たちの研究を理解するために多くの方々に参加して下さいました。



柏市中央公民館で行われた一般講演会

### AGS総会へ市民派遣

柏キャンパスと地域との連携方策の一環として、本学とマサチューセッツ工科大学及びスイス連邦工科大学との三者で進めているAGS計画(人間地球圏の存続を求める学術研究教育活動)の年次総会(1月14日~17日、スイス連邦工科大学ローザンヌ校で開催)へ、公募による応募者87名から選考された千葉県在住市民5名を派遣しました。市民の皆さんは、気候変動、都市の管理等の地球環境をテーマにした研究発表会や、ポスターセッション等に熱心に参加するとともに、研究者・学生との交流も行いました。



運営総長、小林副学長を囲む市民の皆さん(レセプション会場にて)



夏休みに行われた、高校生を対象にした基礎科学講座(物性研究所内での講義)



柏キャンパスの一般公開



# 世界に開く

## 留学生センターの役割



留学生交流プラザで談笑する世界各国からの留学生の皆さん

東京大学は世界に開かれた大学として、現在世界の八〇の国と地域から訪れた、二〇〇〇名以上の留学生の方々日々学んでいます。留学生を通じて国際交流は、教育・研究の国際化・活性化を促し、国際理解と国際協力の精神の醸成をもたらします。途上国からの留学生の場合には、その人材養成に協力する意味もあります。留学生センターの主目的は、留学生のための日本語・日本事情に関する教育、留学生の修学上及び生活上の指導・助言を行うこととされています。これらを受けて、私たちは種々の工夫と努力を重ねています。

私たちの大切な使命は、留学生の日本語力向上に役立つことです。そのため、日本語教育部門に、留学生のレベルとニーズに合わせて、初級から最上級まで、少人数や多人数クラスなど種々のレベルのクラスを開設し、日本語の上達のお手伝いをしています。本来は大使館推薦の国費留学生のために設置されたのですが、余力のある限り私費留学生、その家族、研究員の方たちにも門戸を開いています。現在、センターでは約三〇〇人の方々が学んでいます。教室のスペースや教官数の制約があり、希望者全員を受け入れ



本郷小学校の生徒さんたちとの交流



和気あいの日本語教室風景

ることができないのが残念です。

相談・指導部門においては、留学生の教育・研究上の相談をはじめ、家族問題や学外でのトラブル、一般社会における生活全般の悩み事などの相談、指導・助言、カウンセリングによる心のケアなどを行っています。地域との交流にも積極的に取り組み、近隣小・中学校の総合学習授業の一環として行われる国際理解教育に協力するため、本学の留学生が講師として招かれたり、また、留学生の交流支援を目的とするボランティア養成講座と協力して、手作りの料理を楽しむ等、相互の異文化理解に成果をあげています。

留学生センターには、留学生交流プラザという談話スペースがあり、英語・中国語・韓国語・日本語の新聞、海外の雑誌などが多数置いてあります。また、隣接の部屋には一〇台のパソコン端末が設置されており、留学生はインターネット等を自由に利用できます。

留学生の苦労はさまざまにありますが、職員等の寄付によって運営されている、東京大学外国人留学生後援会は、奨学金事業、事故・病気等により入院した場合の見舞金、留学生の債務保証人として債務保証を行った教職員等への支援金の支給、民間アパート等に入居する際の機関保証等々を行い、留学生の駆けこみ寺的な働きをしています。

昨年、すべての留学生を対象に生活実態調査を行いました。現在、その内容を専門委員会にて分析・検討しており、留学生の教育・研究にとって最適な環境を作るために、早急に実施・改善すべき点と、中・長期的に行うべき点を取りまとめているところです。まだまだ不十分ですが、全学のご協力のもとに、留学生の方々が充実した日々を送れるよう、一層の充実をはかっていきたいと願っています。

小島孝之(こじま たかゆき 留学生センター長)

# 次世代に開く

## 高校生などのためのオープンキャンパス

毎年入学してくる将来性豊かな新入生のおかげで、大学の血は常に若くフレッシュに保たれます。その意味で、新入生は大学がもっとも必要とする重要な構成員です。しかし、大学で実際にどのような教育研究が行われているのかは、大学進学を考える高校生などには意外と知られておらず、偏差値のみが進学先決定の基準になっていることが少なくありません。東京大学は三つの極を持つ総合大学で、高校生などにその全貌を知ってもらうことはなかなか難しいのですが、将来の構成員候補者たちがその一部なりにとも接し、自らの進路を主体的に考える機会を提供することは大いに意味のあることと言えます。

「東京大学オープンキャンパス二〇〇〇」は、このような意図を持って企画され、二〇〇〇年七月二二日に実施されました。当日前一〇時、抽選で選ばれた三〇〇人近い高校生などが、本郷キャンパスの法文二号館に集まりました。午前中は、塚本勝巳海洋研究所教授による「ウナギ・大回遊の謎」と吉川洋大学院経済学教授による「パブルの話・経済の話」という二つの講義が行われました。ほとんどの高校生にとっては、はじめて聞く大学の講義だったはずですが、彼らの感想は大変好意的でした。午後は、文系志望者、理系志望者に分かれ、文系志望者は法学部、理系志望者は農学部を見学した後、附属図書館、総合研究博物館、大講堂、ジムナジウムなど、

本郷キャンパスの中をグループ別に見学して歩きました。

すべての行事が終了したのは、午後六時。東京大学全学でこのような試みを行うのははじめてだったため、必ずしもすべてがスムーズに運んだわけではありません。しかし、アンケートを読む限りはほとんどの参加者が、この試みに満足し何らかの意義を見出していたようです。東京大学では、高校生の皆さんが受験の前に本学のことを少しでもよく知ることができるよう、今後も色々と工夫を重ねて、魅力あるオープンキャンパスを実施していきたいと考えています。

### アンケートの回答から

#### 講義について

はじめはウナギ? と思っていたが、とても面白かった。私は文科系志望だがわくわくした。とてもすばらしかった。医学部か理学部か進路を迷っていたけれど、やっぱり理学部にはいつか研究したいと思った。経済学なんて難しそうと思って敬遠していたんですが、意外と身近なことをやっているんだなと思いました。事実をただ教えるのではなく、今こういう研究をしているというふうな研究態度、方向性を示してもらえたのでとても面白かった。何よりも、先生方の研究に対する情熱や博識ぶりがよく分かり、ここで学びたいと強く思いました。

#### 午後の見学について

図書館にある本の数に驚いた。本が大好きなので、図書館に住みたくなった。博物館で、大学院生が分かりやすく、親身に説明してくれたので、とても面白かった。はじめに法学部長が「演習は楽しくて3時間でも4時間でも続きます。みんなやめたがらない」とおっしゃったので、私もぜひ参加したいと思い、ゾクゾクしました。いままで自分が思っていた農学部と実際の農学部が全く違うものだったので、農学部も面白そうだなと思った。広くてびっくりした。学生さんたちも落ち着いていてよい感じ。でも安田講堂の前で、草ぼうぼうですね。どの建物もずっしりとした伝統の重みを感じられ、キャンパスにあるたくさんのお木も力があふれている感じがしました。

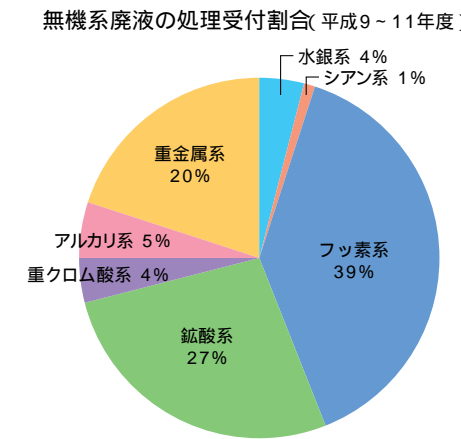




# 望ましい環境創造のために

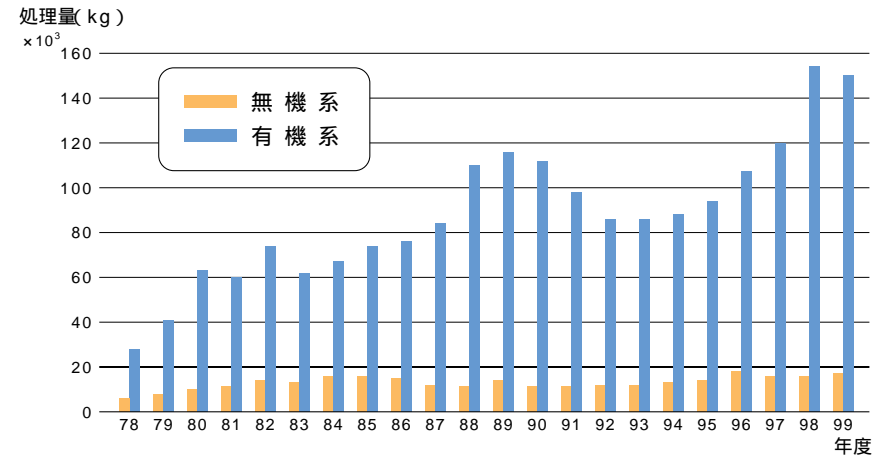
## 環境安全研究センターの取り組み

東京大学はおよそ七七〇〇名の教職員、一六〇〇〇名の学部学生、一二〇〇〇名の大学院生から成る社会的存在です。かつては東京で下水道の使用量ナンバーワンを誇っていました。もっとも、そのかなりの部分は三田池の水源になっていたとの噂もありましたが……。その後節水に努め、現在では、順位が下がっているかもしれませんが、しかし、一般ごみ排出量では、東京大学は東京ドームとやらで文京区内の両横綱だそうです。ところで、大学の使命は何でしょうか。一言で言えば、学問の自由の原則のもとに、新しい学問分野を切り開きつつ、人材育成のための教育を行うことでしょうか。当然、社会の中で、社会のために、社会とともに、その役割を果たすことが大切です。常に新しい事実を求め続けることは大学の大切な役割の一つです。実験科学の分野では、例えば、まったく知られていない物質を合成することに日夜励んでいる研究者が大勢います。もちろん人類の将来のために役立つ知識、現象、物質を求めて研究しているのです。しかし、その実験を進めるために様々な試薬を使います。したがって、実験に使った試薬類を実験終了後、安全に処理しなければなりません。



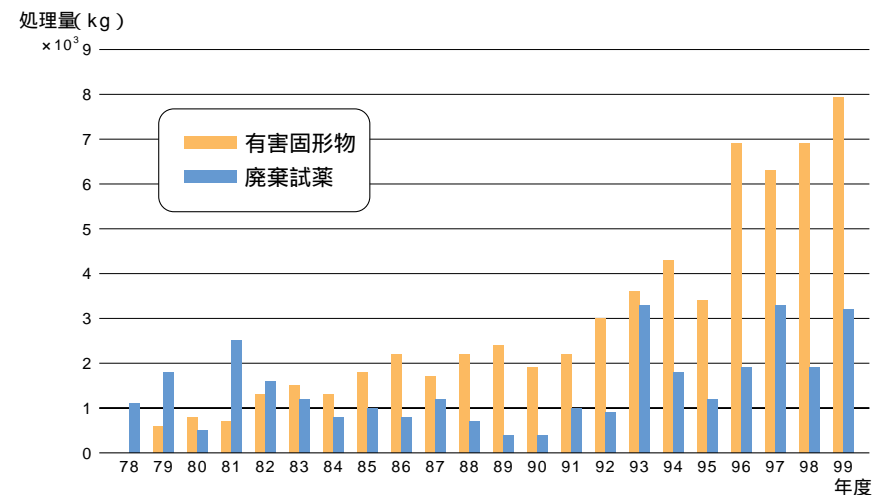
でも水銀、PCB、アスベスト等に関する対策が重要だっただと思います。また、実験廃棄物の増加と多様化(図参照)に対して、学内処理設備の充実を図ってきたことは特筆に値することです。一例として、燃焼炉よりダイオキシン類を排出しないように排ガス処理を高効率化しました。現在では、煙突そのものを必要としない新しい処理プロセスを開発しています。環境安全研究センターは、東京大学の環境の安全性を確保し、「学問の自由」を保障すると共に、社会的なリスクを可能なかぎり低減するために活動しているのです。また、当センターは望ましい環境を実現することを旨とした研究活動を行っています。「都市の水循環」「都市下水の高度処理」「環境計測の高度化」「化学実験装置のマイクロ化」超

実験廃液の年度別処理受付量



臨界水による廃液処理プロセス「内分泌攪乱物質のバイオセンシング」環境管理・処理システム「高度化」等の課題を研究し、地域に密着した環境研究を推進しています。二瓶好正にへい・よしまさ 環境安全研究センター長

有害固形物と廃棄試薬の年度別処理受付量



環境監視のための下水道採水

# 産業界に開く

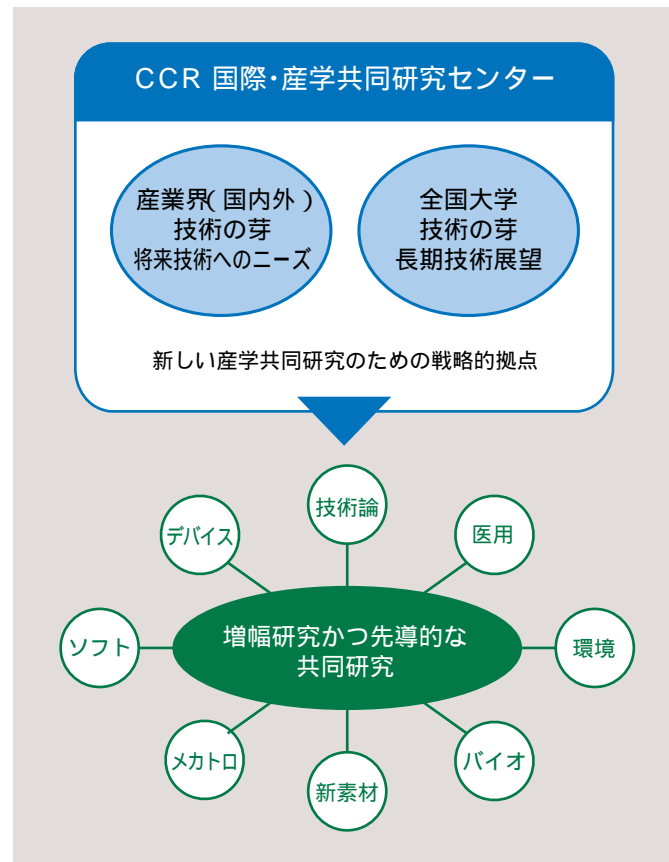
## 企業と大学の大規模共同研究

国際産学共同研究センターは、主に二つの活動を行っています。ひとつは、大学の技術と産業界のニーズをうまく連携させるリゾン活動です。もう一つは、大学で開発された各種の技術を企業技術者との共同研究によって実用化(インキュベーション)することです。本センターには、八人の専任教授と一人の客員教授等がいます。バイオテクノロジーから情報、医療工学、メカトロニクス、材料等の広範囲な分野を専門とするスタッフが

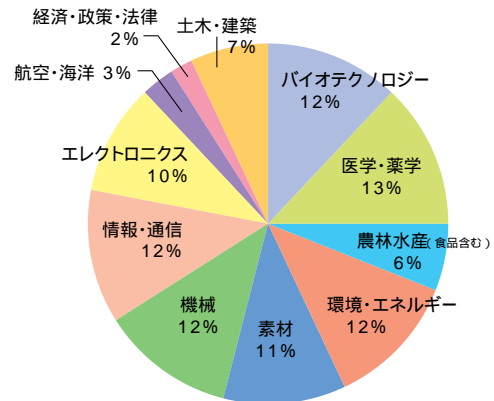
研究に従事しています。産業界から見ると、大学で行われている研究や技術の内容は必ずしも簡単には理解できません。そこで、本センターでは産学連携のために本学教官の提案する共同研究等のデータのデータベースを作り、産業界にインターネット(<http://www-db.ccr.u-tokyo.ac.jp>)で公開しています。平成二二年一月一日付けで約二〇〇件の共同研究のテーマを公開したところ、一日に七〇〇〜八〇〇回のアクセス

があり、最初の一週間で資料請求や共同研究の申し込みが三〇件以上ありました。その後も毎日のように問い合わせがあり、中には、具体的に共同研究を進めたいという申し込みもあります。産業界出身の客員教授と地方自治体出身のリサーチフェローにより、インターネット方式で集めたデータを基にデータベースが作られております。現在、産業界からの要望に合わせて資料を提供したり、共同研究の具体的な条件についてリゾン活動を行っています。

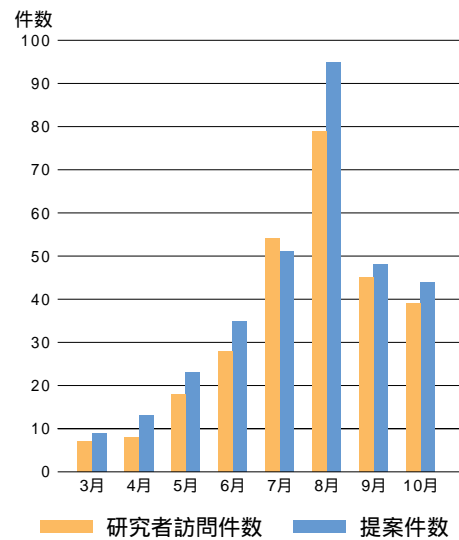
ンダストリー協会等が加わっています。代表者、児玉龍彦教授。これ以外にも、各教官が個別に多くの産学共同研究を進めています。今日、大学の社会への貢献が問われています。本センターの行っているデータベースの公開やリゾン活動、大型産学共同研究が、その一助となればと考えています。軽部征夫(かへい)さま 国際・産学共同研究センター長



提案テーマの 카테고리別提案状況

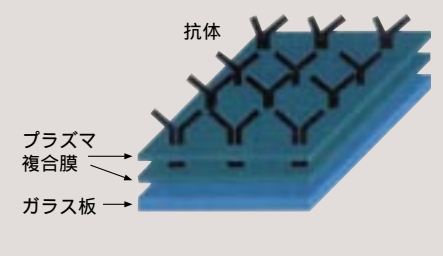


月別訪問・提案件数推移(平成12年)



### 抗体チップの概念図

多種類の抗体を固定化したチップで一度に多数のタンパク質を検出する





# 大学と私

外から見た東京大学とは、  
卒業生へのインタビュー

毎年三〇〇〇名もの学部卒業生を送り出している東京大学。その多くは、研究を行うために大学院に進んだり、官公庁や民間企業に就職することは「承知の通り」です。しかし、実は卒業生の進路は多様です。こんなところに、と思えるところでも東京大学の卒業生が活躍しています。ここでは、そんな「異色の卒業生」のうちから三人にインタビューし、外から見た東京大学について語ってもらいました。

## 開業医と東大

東京大学医学部の卒業生のなかで、街の開業医として直接社会と接しているのは、一学年（ほぼ一〇〇人）に、一〇人前後です。リウマ



チ・東洋医学を専門に開業されている松多邦雄さんもそのうちの一人です。松多さんは

一九七一年に医学部を卒業され、十数年東大病院物療内科に在籍された後に、八年前、東京・下北沢に松多内科医院を開院されました。鍼灸や漢方治療を実践される一方、西洋医学の最先端をいく免疫学・生化学・分子生物学の研究に造詣も深く、まさに東西の英知を集めてリウマチという難病に立ち向かっていらっしゃいます。

Q 大学時代は、どんな生活でしたか。  
ずっと大学紛争だったからね。やる事がなかったから、鍼灸学校に三年間通って鍼灸

## 松多邦雄さん

Q どんな学生時代でしたか。  
授業はそこそこ出てました。進学振り分けがあったし。もともと数学や物理が好きだったので、理Ⅰに入ったんです。とりあえず大学に入れば将来の道も決まるかなと考えていたのですが、甘かったですね。自分が大学で学ぶことが、将来どうい風に職業につながるかです。いぶん悩みました。物事を深く突っ込んで考えるのが好きだったので、研究者向きかなとも思ったのですが、やっぱり直接社会と関わるところで生きて行きたいという思いの方が強かったですね。最終的に建築学科を選んだのも、自分が作ったものが世の中と接点を持ちうるというところに惹かれたからです。それに、小さいときから工作も好きだったんですよ。

Q 女優の道に進んだ理由はありますか。  
自分がやりたいことを絶対に見つけるんだという気持ちで、ずっと強かったんです。高校の時に映画が好きで、そういう世界に入り込めたら幸せだな、と思ったことはありましたが、あの当時ははるかに遠い夢でしかありませんでした。大学で建築学科に進むことが決まった頃、スカウトされました。そのとき、自分が本当にやりたいのは、そのまま建築の道を行くことではなくて女優になることなんだ、と強く感じたのです。不安がなかったわ

Q 女優の道に進んだ理由はありますか。  
自分がやりたいことを絶対に見つけるんだという気持ちで、ずっと強かったんです。高校の時に映画が好きで、そういう世界に入り込めたら幸せだな、と思ったことはありましたが、あの当時ははるかに遠い夢でしかありませんでした。大学で建築学科に進むことが決まった頃、スカウトされました。そのとき、自分が本当にやりたいのは、そのまま建築の道を行くことではなくて女優になることなんだ、と強く感じたのです。不安がなかったわ

## 演劇と東京大学

一九七八年に文学部仏文科を卒業した高萩宏さんは、学生時代から演劇の世界と接し、東大卒としては珍しくその道のプロフェッショナルとなりまし。現在、世田谷パブリックシアター制作課長として活躍する一方で、卒

けではありませんが、「一度しかない人生、自分のやりたいことが出来るのならやっちゃえ!」と思い切ってこの世界に飛び込みました。でも、卒業論文と卒業制作は頑張りましたよ。楽しかったけれど、大変でした。  
Q 「東大卒」ということにこだわりはありませんか。  
世間では、東大卒っていまだに昔のイメージが強いみたいです。分厚いめがねをかけて、視野が狭くて……、って。本当は東大生といても色々なんですけどね。私はとにかく中身で判断してほしいと思っています。自分は自分ですから。いまは東大卒ということ意識していません。

Q 東京大学に望むことをおっしゃって下さい。  
面白い授業をたくさんやってほしいですね。時代も進んでいるわけだし、型にはまらない自由な発想の授業があったら面白いだろうなあと思っています。いままでの科目の枠を越えて、遊びみたいな要素が入った授業なんていいんじゃないですか。  
Q いまの仕事に満足していますか。  
まだ振り返る時期ではないので、いまは目の前のことを一所懸命、楽しんでやっています。この仕事ができよかったと思っ

Q 演劇関係のお仕事をずっとやられてきたわけですが、この分野のお仕事で「東大卒」  
業後二〇年あまり経って、再び東京大学とも関わるようになりました。これからの東京大学は、演劇とどんな関係を持つべきなのでしょう。か。

をマスターしました。そう言う意味で、きわめて有意義だったよ笑。  
Q もともと東洋医学に興味をお持ちだったのですか。  
子供の頃、まわりがいい医者がいなくて、具合が悪くなると鍼灸師に治してもらっていました。遠縁にあたる人に、東洋医学の大家がいたことも影響しているかな。  
Q 「東大卒」ということは、どういう意味を持っていますか。  
やっぱり友達かな。入院の必要な患者さんを紹介するときに、同級生はじめ、東大時代の友人や知り合いには本當にお世話になっていて、助かっています。

Q 東大に望むことをお聞かせ下さい。  
いけばん感じているのは、インターネットなどで、東大の中でどんな研究が進んでいるかを、外からわかりやすくして欲しい、ということかな。たとえば、このあいだ、物理療法の効果を定量化するのに非常に役に立つ研究が工学部で行われていることがわかったん

## 女優か建築家が

テレビ・映画で活躍している女優の菊川怜さんは、二〇〇〇年三月に工学部建築学科を卒業したばかりです。指導した教官によると、彼女は大変優秀な学生で大学院に進むことも期待されていたそうです。東京大学を卒業して芸能界に進むという例は、これまでにもなかったわけではありませんが、きわめて珍しいと言えます。建築家を目指した彼女がなぜ女優を職業に選んだのか、社会に出て東京大学はどう見えるのかなどを語っていただきました。



## 菊川 怜さん

だけれど、それが見つかるまでにずいぶん時間がかかってしまいました。東大の中では、いろいろな面白い研究が動いていて、外部の研究者にもずいぶん役に立つと思っただけで、現状ではなかなかそれを見つけないことのできない。そう言う意味で、情報公開がもっと進むといいと思います。

病院でも、難しい疾患について、どういった専門家に相談したらいいかがすぐにわかるようなホームページを作ってくれるといい。それから、病院は、民間の病院や医院との連携をもっと少し密にしてほしいと思います。  
Q 東大医学部でも夏休みの病院実習として、大きな病院に学生さんが研修に行くシステムはあるみたいですね。でも、他の大学では、開業医に対しても同じようなシステムがありません。より患者さんに密着した医療、と言っ意味で、東大でもこれを作ってくれるといいなと思います。



## 高萩 宏さん



世田谷パブリックシアター

はどのような意味を持っているのでしょうか。  
卒業後はまず紀伊国屋書店に就職しました。演劇活動に専念するまで三年間勤務したんです。会社内では東大卒ということでも何かあったのかもしれないが、特に意識したことはありません。その後、劇団・夢の遊眠社の創立に専念し、それからさらに東京・グロリア座のプロデューサー、現在の世田谷パブリックシアターのジェネラル・プロデューサーと、ずっと演劇の制作現場に身を置いてきました。その間、特に「東大卒」を意識したことも、させられたこともないですね。

Q 東大在学中はどんな学生生活でしたか。  
高校時代から演劇活動をやっていて、東大に入ってからもそのまま、野田秀樹さんなんかと東大の演劇研究会で演劇を続けていました。とはいえ、最初はサークル的な活動で、普通の学生生活だったと思います。三年生の時に劇団の評判が高くなって外の劇場で公演することにになりました。そのとき、「夢の遊眠社」という劇団名になったのですが、それ以降は演劇活動にどっぷりつかってしまった、という感じですね。でも、文学部の授業にはそれなりに出席しました。ただ、自分がやっている演劇活動と、授業で教えられているアカデミックな演劇との落差に、驚いたということ

Q 東大はどのような学生生活でしたか。  
高校時代から演劇活動をやっていて、東大に入ってからもそのまま、野田秀樹さんなんかと東大の演劇研究会で演劇を続けていました。とはいえ、最初はサークル的な活動で、普通の学生生活だったと思います。三年生の時に劇団の評判が高くなって外の劇場で公演することにになりました。そのとき、「夢の遊眠社」という劇団名になったのですが、それ以降は演劇活動にどっぷりつかってしまった、という感じですね。でも、文学部の授業にはそれなりに出席しました。ただ、自分がやっている演劇活動と、授業で教えられているアカデミックな演劇との落差に、驚いたということ

Q 東大はどのような学生生活でしたか。  
高校時代から演劇活動をやっていて、東大に入ってからもそのまま、野田秀樹さんなんかと東大の演劇研究会で演劇を続けていました。とはいえ、最初はサークル的な活動で、普通の学生生活だったと思います。三年生の時に劇団の評判が高くなって外の劇場で公演することにになりました。そのとき、「夢の遊眠社」という劇団名になったのですが、それ以降は演劇活動にどっぷりつかってしまった、という感じですね。でも、文学部の授業にはそれなりに出席しました。ただ、自分がやっている演劇活動と、授業で教えられているアカデミックな演劇との落差に、驚いたということ

Q いまは大学院(人文社会学系研究科)に非常勤でお見えになって、アートアドミニストレーションを教えていらっしゃるようですが、その経験も含め、東大に望むことは。  
劇団と一緒に海外に行ったり、アメリカのロンビア大学の大学院でアートアドミニストレーションを学んだりして痛感したのは、演劇が持つ社会的な意味や役割が、欧米社会などでははつきり理解されていて、演劇が教育システムの中に位置づけられているということでした。日本でも、演劇のような文化活動の社会的重要性が徐々に認識されつつありますが、演劇教育でも観客養成でも、まだまだなんです。  
Q 東大のようなブランド性がある教育・研究機関には、学問の狭い世界に閉じこもりず、社会の動きと連動しつつ、学部や大学院のレベルでの教育をより広い視野から捉えなおしてほしい。地方自治体や企業などと生産的な関係を結びながら、より豊かな演劇文化の創出に寄与するようなこと、つまり、今まで以上に広範な社会性を持つような教育・研究のあり方を探るといようなことも、今後の東大に課せられた課題の一つなのではないでしょうか。





# 公開講座の歴史とテーマ

約五〇年にわたり開催され続けている  
東京大学公開講座のあゆみ

大学での教育や研究の成果を、社会に対して発信する場のひとつが誰も  
が参加することのできる公開講座です。東京大学の公開講座の歴史とそ  
こで扱われたテーマの変遷をたどります。

大学は、一般に知られている以上に、社会  
(世間)に開かれて来たし、現在も開かれてい  
ます。いま風に表現すれば、近代日本の大学  
はつねに「情報発信の拠点」でした。それは、  
大学という固有の組織と、大学の行う知的営  
為とから導き出される必然なのです。ここで  
取り上げる東京大学の公開講座も、その一つ  
の例です。  
一般に公開講座とは、大学における教育研  
究の成果を、大学人およびそれ以外の人々に

知らせる、普及させること  
と考えてよいでしょう。時  
代によって名称は異なりま  
す。しかし、大学人がそれ  
らの、いわば啓蒙活動に熱  
心で積極的だったことは、  
歴史に明らかです。では、  
本学における公開講座の歴  
史を振り返ってみましょう  
(以下、特に断らない限り、  
公開講座、普及講座につい  
ては『東京大学百年史』資  
料二に拠ります)。  
一八八〇年代に、すでに  
市民に向けての学術啓蒙活動  
が展開されていきました。「理医学  
講談会」は理学部および医学部の教授  
が中心となって一八八四年五月に設置さ  
れ、理医学諸科二開スル事項ヲ平易ニ講  
談演説シ以テ公衆ヲシテ学術上ノ知識ヲ発達  
セシムル」と謳っていました。以来、公開講  
座には百二十数年の歴史が刻まれてきたので  
す。  
現在の公開講座の直接の淵源は、敗戦直後  
にはじまった東京帝国大学普及講座にありま  
す。第一回は法学部の大学普及講座、第二回  
は経済学部の講座と推測されていますが、は  
つきりするのには第三回からです。第三回は一  
九四六年六月に開講され、一〇回行われまし  
た。第四回からは公開講座と改称して、経済  
学講座、文学講座、法学講座といったように、  
統一テーマを掲げていました。一九四八年一  
一月まで二六回の講座が開かれたことが分か  
っています。この中に、現在の公開講座の  
第一回が一九五三年にはじまるのです。  
第一回の講座は、一月十七日から二月十四  
日まで、法学部第一八番教室にて全一〇回開

催されました。ところで公開講座の主催を正  
式に表現すると、財団法人東京大学総合研究  
会となります。この総合研究会は、一九四六  
年一月に「学術の理論及び応用の総合研究  
を振作し、文化の向上、産業の開発、国民生  
活の改善に資し、以て我が国の再建と世界文  
明の発達に寄与する事」を目的に東京帝国大  
学に置かれました。以来、同会が講座を主催  
してきましたが、実際には総長をはじめとし  
た、学部長会議のメンバーが運営の主体です。  
講座の統一テーマ方式は、一九六二年の第  
二一回「都市問題」から始まりました。テー  
マ設定の方法は、毎回一人の学部長・研究科  
長が輪番で企画委員長となり、各学部・研究  
所から七、八人が出て、企画委員会をつくり、  
そこでメイン・テーマを考え、講師を選定し、  
総合研究会に諮り決定しています。東京大学  
公開講座六七 東京大学 はしがき。  
統一テーマ方式がはじまる第二一回以降の  
テーマを一覧化してみました。講座の内容を  
見ると、都市、情報、生活、生き方などに  
かわるテーマが複数取り上げられています。  
それらを読み比べてみるのも、一興でしょう。  
一字のテーマも、家、酒、水、海、空、魚、  
山、光、道、土と結構多くあります。大学の  
周年に沿った企画もあります。一〇〇周年に  
は「明治・大正の学者たち」(第四七回)、一  
二五周年には題名もそのものの「東京大学」  
(第六七回)です。社会の変化に対応したテー  
マももちろん見られます。公害問題(第二八  
回)、高齢化社会(第五〇回)、防災(第八四回)  
などがそつです。  
現在、公開講座は百花繚乱の状態にありま  
す。いろいろな公開講座が開かれている中  
にあって、あらためてその意味を振り返って  
みることも、大事なような気がします。

## 公開講座統一テーマ 一覧(1962年 - 2000年)

1962年 第21回 都市	1983年 第59回 脳と心
第22回 技術革新の問題	第60回 情報化と社会
1963年 第23回 都市と生活	1984年 第61回 愛と人生
第24回 交通と生活	第62回 食べ物
1964年 第25回 生命	1985年 第63回 光
第26回 文学にあらわれた人間像	第64回 高度技術社会と人の生き方
1965年 第27回 宇宙	1986年 第65回 スポーツ
第28回 公害問題	第66回 バイオテクノロジーと社会
1966年 第29回 食糧	1987年 第67回 異文化への理解
第30回 言語	第68回 進化
1967年 第31回 人間と機械	1988年 第69回 道
第32回 家	第70回 ゆとり
1968年 第33回 日本の大学	1989年 第71回 気の世界
1970年 第34回 情報	第72回 土
1971年 第35回 人間と環境	1990年 第73回 環境
第36回 海	第74回 混沌
1972年 第37回 空	1991年 第75回 都市
第38回 親と子	第76回 生と死
1973年 第39回 男と女	1992年 第77回 ライフサイクル
第40回 エネルギー	第78回 性差と文化
1974年 第41回 アジアの中の日本	1993年 第79回 地球
第42回 天災と人災	第80回 アメリカと日本
1975年 第43回 酒	1994年 第81回 結婚
第44回 水	第82回 コメ
1976年 第45回 地震	1995年 第83回 くすり
第46回 健康と生活	第84回 防災
1977年 第47回 明治・大正の学者たち	1996年 第85回 文化としての20世紀
第48回 魚	第86回 現代幸福論
1978年 第49回 流	- 豊かな人生を送るために -
第50回 高齢化社会	1997年 第87回 家族
1979年 第51回 生命	第88回 東京大学
第52回 子ども	1998年 第89回 車(くるま)
1980年 第53回 山	第90回 ゲーム
第54回 文明と人間	1999年 第91回 こよみ
1981年 第55回 ミクロの世界	第92回 夢
第56回 消費者	2000年 第93回 相性(あいしょう)
1982年 第57回 世界と日本	第94回 分ける
第58回 ことば	





# 大学院工学系研究科・工学部

Graduate School of Engineering and Faculty of Engineering



社会が解決を求めている問題の多くは、きわめて複雑です。産業構造と関連をもつ縦型の教育と、科学技術と社会全体を見通す視野に立った、総合的工学教育を実践する横型の教育とを、柔軟に調和させる教育システムを築き上げたいと考えています。

社会と向き合う科学技術  
二〇世紀は、人類膨張の時代でした。知識の量は飛躍的に増大し、机の上のコンピュータから世界へ向かってメッセージを発信することが可能になり、科学技術は、人類生存の基盤である地球生態系そのものを変化させようほどに強大化してきました。こうして、一昔前には、生活を豊かにするという側面しか見えなかった科学技術は、人間社会に対して経済的、政治的、文化的な影響を及ぼすという、多様な側面をあらわしてきたのです。工学は、実社会と密接に関わりあう学問分野です。大学院工学系研究科・工学部では、科学技術の持つこのような多面性を理解し、社会の中で活かされる科学技術を、その原点から研究し教育を行っています。東京大学工学部は、世界で最初に総合大学の中に設置された工学部です。明治一九年の設立以来百余年にわたって、多くの人材を輩出してきました。現在、約二二〇〇名の学部学生、三〇〇〇名近くの大学院生が在籍し、八七〇名ほどのスタッフが働いています。東京大学の中で最大の組織であり、二四の専攻一七の学科から構成されています。

国際化の中での教育・研究  
社会が解決を求めている問題の多くは、きわめて複雑です。ひとつひとつは単純なことがらであっても、多くが関連しあうことによって問題は複雑になります。地球環境、エネルギー、生命倫理、情報化社会、高齢化社会など、多くの問題は複雑です。複雑な問題に対処するためには、これまでに獲得した知識を体系化し、新たな知識を創造し、断片的な

# 東京大学附属図書館

University Library



学生の知的好奇心を刺激し、自ら学習する意欲をかきたてる学習環境を整備することに、図書館は積極的に関与しなければなりません。教員と学生とによる共同作業を、図書館が支援する時代が来たのです。

附属図書館の新たな役割  
大学図書館の使命は、大学の教育・研究活動を支援することであり、学術情報の収集、整理・保存、提供を通してなされるというのが伝統的な考え方でした。このため図書館は、静的あるいは受身的な後方支援に留まり、教育・研究の現場に直接関与する必要はありませんでした。しかし最近、図書館が「教育・研究の現場から」積極的な関わりを求められるようになってきました。

ポータルレス化への対応  
学術研究とその情報の急速なポータルレス化、多様化が進んでいます。例えば環境、生命、情報などの研究分野は、従来の一九世紀的ディスプレイからは完全にはみ出しています。今や研究のフロントアでは、既存の研究分野のポータルレス化は当然のこととなっています。一方で、情報が電子化されることにより、従来のような空間的、時間的な制約がなくなり、組織や学問の壁を自由に通り抜け、リアルタイムで希望する利用者に届くようになりまし。情報のポータルレス化を可能としたのが、コンピュータと情報通信技術の飛躍的発展です。いわゆるIT革命は、これらの傾向をますます推し進めています。

すでに一部の研究分野では、専門の枠内のみならず、広く関連する分野から良質なデジタル学術情報を早く入手しようと、日夜熾烈な競争が行われています。この傾向は今後多くの研究分野に拡大してゆくでしょう。このことは学術雑誌が次々とデジタル化され、インターネットを通してアクセスできる、いわゆるオンライン・ジャーナルの形で提供されるようになっていくことから容易に推察できます。数年の後は、多種多様なオンライン・ジャーナルが統合され、検索エンジンで

もつ巨大なデジタル総合学術資料データベースが生まれていくでしょう。このような総合データベースが、研究者にとってこの上ない利便性を持つことは確かですが、価格は年を追うごとに高騰しており、導入には全学的視野に立った検討が必要となつていきます。紙媒体の情報を前提とした従来の「附属図書館」体制では、学術資料の購入は研究者あるいはそのグループが自前の研究費等で自由に選択してきました。しかし、今後は研究者間の利害を調整し、研究者が必要とする高額データベースの選択と購入資金の調達を受け持つことが、「研究現場から」要求される附属図書館の新たな役割となることはまちがひありません。

東京大学では、オンライン・ジャーナル導入試行実験を平成一二年四月から開始しました。現在、約二四〇〇タイトルの外国雑誌がネットワークを通じて全学で利用でき、毎週九〇〇回のアクセスがあります。

学習活動支援に向けて

リベラルアーツを重視する教育体制を維持している東京大学では、学習と教育のコンビネーションが重要な意味を持っています。リベラルアーツの根幹は、与えられた情報・知識を、自発的な学習によって咀嚼・消化し、体系として身に付け活用するための訓練です。だとすれば、学生の知的好奇心を刺激し、自ら学習する意欲をかきたてる学習環境を整備することに、図書館は積極的に関与しなければなりません。言い換えれば、学習・教育・研究の現場で、の教員と学生とによる共同作業を、図書館が支援する時代が来たのです。講義をもとに学生が図書館に足を運び、自ら



(上) 工学部新2・3号館構想図  
(下) 1号館建築学科図書館

知識を目的のために統合する手法が必要です。工学部に附属する総合試験所は、こうしたニーズに応えるための新しい工学の実験場です。人間社会及び地球環境との共生をめざした新しい工学像を社会に向けて発信し、新しい産業像を提示するための技術哲学と工学理論研究を、俯瞰「工学と位置づけて進めよう」としています。また、大学が社会や産業界との連携を通じ、科学技術の創造を達成する方法を研究する「連携」工学、細分化した研究領域間の学際研究のあり方を研究する「協調」工学を加え、三つの柱をもつ研究センターとして機能の強化を図っています。

また、大学院工学系研究科・工学部は、大学院新領域創成科学研究科や大学院情報学環、さらに大学院情報理工学研究所設立のために多くの教官を送り出し、新しい学問分野の創出をめざしています。

工学部における教育のあり方にも、大きな変革が必要です。産業構造と関連をもつ縦型の教育と、科学技術と社会全体を見通す視野に立った、総合的工学教育を実践する横型の教育とを、柔軟に調和させる教育システムを築き上げたいと考えています。工学部共通教育では、生体生命、工学倫理に関する教育プログラムを強化しています。

平成二二年度からは、精密機械工学科、船舶海洋工学科、システム量子工学科、地球システム工学科がシステム創成学科に統合さ

オンライン・ジャーナル導入実験ベストリーディング上位10誌 (2000年4月3日～2001年1月31日)

順位	タイトル
1	Nature
2	Science
3	Cell
4	Journal of Biological Chemistry
5	Proceedings of the National Academy of Sciences
6	Nature Genetics
7	Molecular and Cellular Biology
8	EMBO Journal
9	Journal of Cell Biology
10	Neuron

資料を的確に探し出し、レポートをまとめ、教官からのタフな質問に耐えるといった訓練を通して、知の獲得と創造のプロセスを体得できるでしょう。近い将来、図書館が「学習・教育の現場から」このような貢献を実践していることはまちがひありません。落合卓四郎 おちあい・たくしろう 附属図書館長

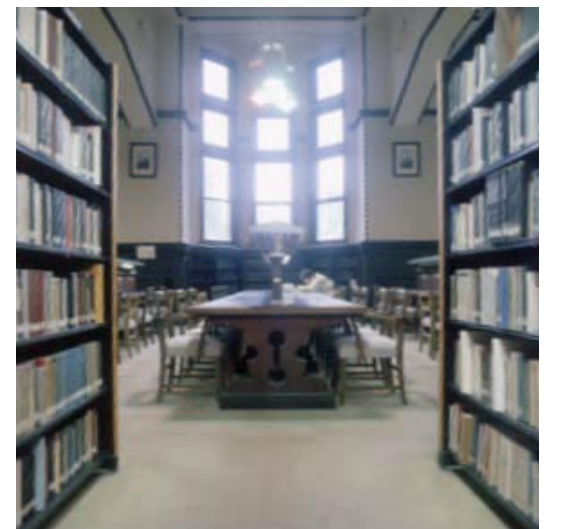
れ、幅の広い科学技術を創造し、これを総合的にとらえる教育システムができました。これらの教育プログラムでは、動機付けプロジェクトや少人数演習等を通じて、グローバル化が進む社会で活躍する人材に要請される、問題の発見能力と解析能力、創造性と基礎学力、スペシャリティとジェネラルな思考といった、デュアル指向のできる人材の養成をめざしています。

ビジョンを提案し実現する工学  
二〇世紀が膨張と警告の時代であったすれば、二一世紀はビジョンを提案し実現する時代になるべきではないでしょうか。

大学院工学系研究科・工学部は、平成二二年六月に「工学は何をめざすのか」東京大学工学部は考える」を東京大学出版会から刊行しました。ここでは多くの教官の議論に基づいた工学ビジョンを外部的に発信しました。その発展として、平成一三年一月よりイブニングセミナーを開催します。広く一般の方々にもご参加いただき、現在の大学を取り巻く状況に基づいて、工学部がめざす二一世紀社会とそのビジョン実現の方法を議論してゆきたいと考えています。

ホームページ <http://www.t.u.tokyo.ac.jp>  
も、是非ご覧下さい。

小宮山宏 こみやま・ひろし 大学院工学系研究科長・工学部長





# 半導体デバイスの開発から ナノアーキテクトへ

電子の量子的な制御により従来のデバイスの限界を破る試み、先駆的な研究を続けられる神裕之教授を訪ねて。



神裕之教授

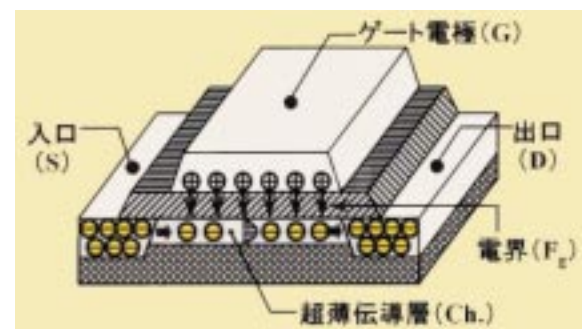
半導体デバイスの先駆的な研究をされている神裕之教授を生産技術研究所を訪ね、話を伺いました。専門は固体電子工学で、電子の量子的な性質が現われるほどに小さな半導体ナノ構造を対象として電子の物理を調べ、その応用を探索しています。特に、電子の量子的な制御により従来のデバイスの限界を破る試みをされています。

## 歴史

高校時代は外交官志望で国連勤務を夢みていたそうです。1962年に高校3年でアメリカに留学。ケネディの平和部隊構想などに接して衝撃を受け、技術を通じての国際貢献に魅力を感じたのが、工学分野に進んだきっかけです。大学では電子工学を専攻。以来、一貫して半導体電子工学の研究を進めています。半導体は、絶縁体と同様に、自由な電子がほとんどない物質ですが、正に帯電した金属板を近づけると自由な電子が湧きだし、電流が流れます。この性質を巧みに用いたのがトランジスタです。この半導体を約10nm(ナノミリ)の超薄膜にすると、その中の電子が量子的な波としての性質を示すため、これまでにない機能のデバイスが作り出せます。この電子波を制御し、電子工学に活かすのが研究の狙いです。電子の量子的な波といえば難解なイメージがありますが、私たちが取り巻く世界の様々な波とも似た面もあります。例えば、弦楽器は弦と空気の振動を利用し、放送や携帯電話では電波を用います。それぞれ、ニュートン力学やマクスウェル電磁理論で設計ができます。これに対し極微の世界の電子波は、量子力学を基に制御します。

## 超薄膜の研究

神教授は約30年前に、トランジスタ内の超薄膜伝導層に着目し、電子の波動性をもごとに示しました。さらに、IBMの江崎博士が超薄膜を積み重ねた超格子を提唱して間もなく、神教授はIBMに招請され、超格子の揺籃期から先駆的成果をあげ、この分野を先導しています。例えば、超薄膜に赤外線を入れると、電子の波の振動状態が変化し、赤外線検出に利用できます。この検出器は、人の体温分布の計測などに利用されています。最近、この超薄膜検出器の逆プロセスを用いた赤外線レーザーが米



超薄膜を用いたトランジスタ(TFT)

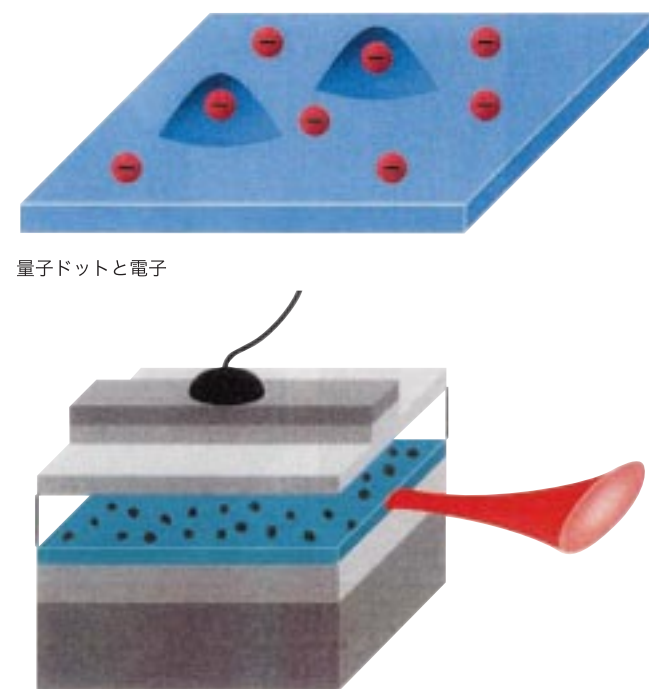
国で発展し、各種の気体の高分解検出に利用され、呼気中のアンモニアの分析により、胃潰瘍の原因といわれるピロリ菌の非侵襲検出にも利用されつつあります。

## 未来へ

研究の対象は超薄膜に留まらず、極微の細線や箱状の半導体で電子を量子的に制御し、新デバイスに応用する初の提案を1975年に行っています。当初、形成技術がなく難行しましたが、10年くらい前からはナノメートルのレベルでの量子的な細線や量子ドット(箱)を作る技術が発展してきており、そのユニークな物性の実証や新デバイス機能の実験的研究が活発化しています。量子ドット内の電子の有無を用いたメモリーや、波長が1から10ミクロン域の赤外光の作用でドット(箱)内の電子の出入りを制御した赤外線の検出器、さらにわずかな電流で動くレーザー機能なども示され、今後の発展が期待されています。

この半導体の基本原理から量子ドット研究の最前線までを紹介頂いたほか、卓越した研究をする上で国境や専門分野の壁を超えた協力の重要性など、示唆に富む話をいただきました。

インタビュー 黒瀬等(大学院薬学系研究科助教授)



量子ドットレーザーの概念図



Research Unit for  
Biological Resources and Development,  
The University of Tokyo  
at Institut Pertanian Bogor

# 東南アジア生物資源開発研究の 拠点としてのボゴール基地

東京大学は、1997年12月20日に、初めての海外学術交流拠点として東南アジア生物資源開発研究施設(Research Unit for Biological Resources and Development — The University of Tokyo at Institut Pertanian Bogor, RUBRD-UT/IPBと略す)をインドネシアのボゴール農科大学内に開設しました。さらに、1998年度からは、日本学術振興会の拠点大学方式によって、東京大学大学院農学生命科学研究科とボゴール農科大学との間で10年間に及ぶ学術交流事業が開始され、いよいよ本施設が本格的に稼働し始めました。それと同時に、ボゴール農科大学との学術交流に関する協定書に基づき、毎年3名以内の交換留学生の派遣も決定し、ボゴール農科大学との学術交流に関し、拠点施設整備、研究者交流、学生交流を一体的に推進する体制が整いました。



研究施設と学生たち

本施設は、現在整備が進んでいるボゴール農科大学ダルマガ・キャンパスの、広大な敷地の一角にある畜産学部棟(Animal Husbandry)の2階と4階の一部にあり、2階には秘書室、学生室及び実験室、4階には教室と教官控え室があります。主な設備としては、コンピュータや電話、ファックスが備えられ、日本と連絡が取れるようになっています。一方、実験設備の整備に関しては、施設の利用状況との関係から今後の検討課題です。なお、日本側とインドネシア側双方の連絡役としてSariyati Silalahi女史に秘書を勤めていただき、施設維持や交流事業に係わる事務処理のほか、本施設を訪問する研究者の車や宿舎の手配、調査日程の調整、ジャカルタ空港への送迎などをお願いしています。

このように、本施設は拠点大学交流事業、交換留学生事業、農学国際専攻の海外実地研究などさまざまに活用され、十分にその機能を発揮しています。

永田信 ながた・しん 大学院農学生命科学研究科教授)



農村でのインタビュー調査



養魚池での水質測定





本号の編集、写真の使用にあたっては、多くの方々にご助力、ご協力をいただきました。

表紙の写真は、2000年4月に柏キャンパス(千葉県柏市)へ移転した物性研究所です。

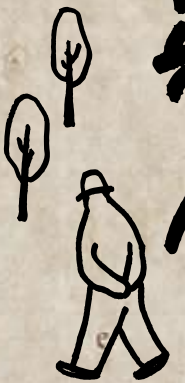
編集発行 東京大学広報委員会  
 編集委員 大塚柳太郎  
 大学院医学系研究科教授  
 土屋尚之  
 大学院医学系研究科助教授  
 内野儀  
 大学院総合文化研究科助教授  
 黒瀬等  
 大学院薬学系研究科助教授  
 羽田正  
 東洋文化研究所教授  
 大矢禎一  
 大学院新領域創成科学研究科教授  
 中野実  
 東京大学史料室助教授

印刷・製本 印象社  
発行日 平成13年2月28日

お問い合わせ先  
 東京大学総務部総務課広報室  
 〒113-8654  
 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
 電話 03-3811-3393  
 FAX 03-3816-3913  
 E-mail: kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp  
 URL: http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

# キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。その歴史あるたたずまいに眼を向けると、新しい発見に出会う。



散歩人



藤井恵介

## 東大の講堂と卒業式

1) 1) 1) 一枚の新発見の写真図①、The University of Tokyo 1877-2000 大学史史料室編がある。大正三年に竣工した法文科大学講堂の内部が写っている。この建築は「八角講堂」と俗称されていた。関東大震災(大正一二年)で焼けた後、トタン屋根を懸けるという応急処置を受けたが、数年後に取り壊されてしまった。ほんの十数年だけの命だ。しかし、建設当時の設計図が施設部に残されていて詳細までわかる。ゴシック風の外觀は明治一〇年代の法文科大学校舎の様式に倣っているが、独立性の強い八角形という形そのものが印象的だ(図②)。だが、何といても魅力的なのは内部の天井の作り方だ(図③)。格子で組んだドームになっていて、屋根を支える鉄骨から吊り下げている。

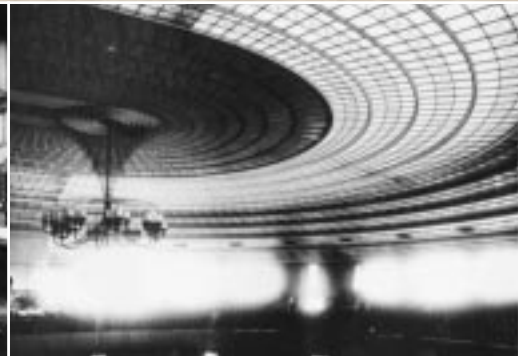
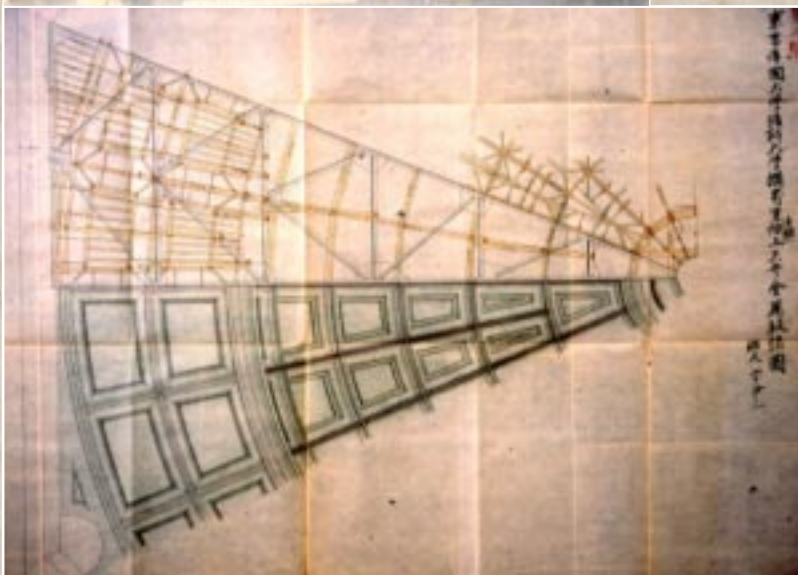
この写真を見て改めて驚いた。まるでローマのパンテオンのようじゃないか、言い過ぎだとするは東京駅のドームか。大きな空間の質を決定するのは天井の表現だ。そういえば、安田講堂(大講堂)の天井も凝っている(図④)。大きなシャンデリアが中央から下がり、同心円状の輪が幾重にもかさなり、幾何学的な模様が入って、トップライト

の光を天井裏から取り込んでいる。東大の講堂を調べていると、どうしても工部大学校(工学部の前身)の講堂(図⑤)にたどりついてしまう。虎ノ門に明治一一年に竣工した校舎は、フランス人ボアンヴィルの設計になるが、中央に講堂がでんと構えていた。内部は極めて装飾豊かで、天井は華やかな格天井である。明治初期、東京にまだ本格的西洋風建築が無い時代、様々な催しに用いられたという。

今回「東京帝国大学五十年史」を調べてみたら二重に驚いた。というのは、今まで気になっていた三つの講堂が全部卒業式に関わっていたからである。東京大学が帝国大学となった直後、明治一九年七月一〇日に挙行された第一回目の卒業式(卒業証書授与式)は「工科大学中堂」を会場とした。本郷で工科大学の校舎が竣工するのは二年後の七月だから、これは当然旧工部大学校の講堂だ。卒業生は一〇〇人内外だが、列席者は三〇〇人を越えたという。明治二年からは新築の工科大学中庭で挙行された。遅れて帝国大学に編入された工科大学の建物が使われたのは面白い。卒業式にふさわしい、大規模な立派な施設が他になかったということか。

さらに大正三年に八角講堂が竣工すると、翌年からここに移る。前出「五十年史」は「中央大講堂」という言い方をしている。卒業生が一〇〇人を越えようとしていた時点で、新たな広場が必要となつたらしい。明治三年以来、卒業式には天皇の臨幸が慣例となつてきた。そのため式場には極上のデザインが要求された。しかし、大正七年をもって大学全体での卒業式は廃止され、臨幸もなくなった。

安田講堂が大正末年に計画されたのは、天皇の再びの臨幸を願い、便殿(天皇の休息所)を備えた大講堂を造ろうとしたことが動機である。どうやら学内の見事な講堂は、卒業式と天皇の臨幸に深く関わっていたらしい。



図① 八角講堂内部 写真(谷喬氏蔵)  
 図② 八角講堂外部 写真(谷喬氏蔵)  
 図③ 八角講堂天井 写真(施設部蔵)  
 図④ 安田講堂内部 写真(建築学専攻蔵)  
 図⑤ 工部大学校講堂内部 写真(建築学専攻蔵)



▶ 展示

総合研究博物館 骨 - 生きものを支えるもの  
 4月15日(月) - 6月29日(金)  
 総合研究博物館  
 問い合わせ: ハローダイヤル  
 ☎03-3272-8600



総合研究博物館「神岡鉱山画像資料」展  
 4月16日(月) - 6月29日(金)  
 総合研究博物館  
 問い合わせ: ハローダイヤル  
 ☎03-3272-8600  
 総合研究博物館 東京大学コレクションXI  
 「和田標本」展  
 7月17日(火) - 9月30日(日)  
 総合研究博物館  
 問い合わせ: ハローダイヤル  
 ☎03-3272-8600  
 URL<http://www.um.u-tokyo.ac.jp>

▶ 公開講座

第95回(平成13年・春季)東京大学公開講座  
 テーマ「未来」  
 4月7日(土) 14日(土) 21日(土) 5月12日(土)  
 19日(土) 大講堂 安田講堂)  
 問い合わせ: 財団法人 東京大学総合研究会  
 ☎03-3815-8345  
 千葉演習林の一般公開  
 4月21日(土) - 22日(日) 千葉演習林猪ノ川溪谷  
 問い合わせ: 千葉演習林天津事務所  
 ☎0470-94-0621  
 北海道演習林 公開セミナー  
 5月下旬 / 北海道演習林  
 問い合わせ: 北海道演習林庶務掛  
 ☎0167-42-2111  
 秩父演習林 市民公開講座「森へ行こう」(仮題)  
 5月下旬 / 秩父演習林  
 問い合わせ: 秩父演習林事務所  
 ☎0494-22-0272  
 URL<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chichibu>  
 農学部公開セミナー  
 6月9日(土) 弥生講堂一条ホール  
 問い合わせ: 農学系総務課広報情報処理掛  
 ☎03-5841-8179  
 千葉演習林 夏の森林教室  
 7月下旬 / 千葉演習林  
 千葉演習林天津事務所  
 電話0470-94-0621  
 秩父演習林地域開放事業「森の楽しみ」(仮題)  
 9月下旬 / 秩父演習林  
 問い合わせ: 秩父演習林事務所  
 ☎0494-22-0272  
 URL<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chichibu>

▶ 演奏会

オルガン定期演奏会  
 第91回 5月18日(金) 8時30分 ~ / 教養学部  
 900番教室  
 Organ: Bernhard Roemer(ドイツ, Aschaffenburg  
 のChristuskirche, HildesheimのSt. Andreaskirche  
 の音楽監督)  
 第92回 5月25日(金) 8時30分 ~ / 同上  
 Organ duo: Colin Andrews & Janette Fisher(ア  
 メリカ人とイギリス人の夫妻, East Carolina  
 Universityのオルガン科主任のほか、いくつかの  
 協会の音楽監督)  
 問い合わせ: 教養学部オルガン委員会 塚本  
 明子  
 ☎03-5454-6280  
 E-mail<akiko@platon.c.u-tokyo.ac.jp>

▶ シンポジウムなど

IMSUT COE国際シンポジウム「Post-Genome  
 World of RNA」  
 3月1日(木) - 3日(土) / 医科学研究所講堂  
 問い合わせ: 医科学研究所 中村義一  
 ☎03-5449-5307  
 「情報が拓く21世紀の科学と技術」  
 3月2日(金) 0時00分 ~ 15時00分 / 弥生講堂一  
 条ホール  
 問い合わせ: 計数工学専攻  
 URL<http://www.i.u-tokyo.ac.jp>  
 Symposium on Smart Control of Turbulence  
 3月5日(月) - 6日(火) / 山上会館  
 問い合わせ: 機械工学専攻 笠木伸英  
 E-mail<kasagj@thtlab.t.u-tokyo.ac.jp>  
 URL<http://www.srimot.go.jp/turbulence/  
 japanese/symposium.html>  
 国際シンポジウム Life Science Frontiers in  
 the New Century: Scientists in Asia and the  
 Pacific Rim  
 3月22日(木) 大講堂 安田講堂)  
 問い合わせ: 医科学研究所所長室  
 ☎03-5449-5201  
 第28回医科学研究所シンポジウム  
 6月1日(金) / 医科学研究所 講堂  
 問い合わせ: 医科学研究所 研究助成掛  
 ☎03-5449-5751  
 大学院工学系研究科電気系3専攻講演会な  
 らびに研究室公開  
 7月4日(水) / 工学部3号館、10号館、13号館、  
 14号館 電気系学科研究室)  
 問い合わせ: 電気工学専攻 藤井康正  
 ☎03-5841-6677  
 URL<http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/OpenHouse  
 2001.html>

第95回(平成13年・春季) 東京大学公開講座  
 テーマ 「未来」  
 プログラム

区分	時間	講義 題目	所属・官職	氏名	専攻分野
第1日 4月7日 (土)	13:30~ 13:40	開 講 の 挨 拶	東京大学 総長		
	13:40~ 15:00	地 球 と 人 間 圏 の 未 来	新領域創 成科学研究 科教授	松井孝典	地球惑星 物理学
	15:20~ 16:40	宇 宙 の 未 来 論	理学系科 研究科教 授	佐藤勝彦	宇宙論 宇宙物理学
第2日 4月14日 (土)	13:30~ 14:50	臓 器 の 再 生 と 幹 細 胞	分子細胞 生物学研 究所教授	宮島 篤	細胞生物学
	15:10~ 16:30	未 来 に 向 け て 脳 を 育 む - 学 習 ・ 教 育 の 科 学 -	総合文化 研究科 客員教授	小泉英明	分析科学
第3日 4月21日 (土)	13:30~ 14:50	食 品 と 食 生 活 の 未 来	農学生命 科学研究 科教授	上野川修一	応用生命 学
	15:10~ 16:30	21 世 紀 の 食 料 生 産	農学生命 科学研究 科助教授	川島博之	国際環境 経済学
第4日 5月12日 (土)	13:30~ 14:50	日 本 政 治 の 未 来	法学政治 学研究科 教授	蒲島郁夫	現代政治 分析
	15:10~ 16:30	日 本 経 済 の 未 来	経済学 研究科 教授	伊藤元重	国際経済
第5日 5月19日 (土)	13:30~ 14:50	超高齢社会への軟着陸と男女平等	社会科学 研究所 教授	大沢真理	社会政策の比較 ジェンダー分析
	15:10~ 16:30	死 の 先 に あ る 未 来 - 宗教的終末論における滅びと望み -	人文社会 系研究科 助教授	池澤 優	宗 教 学
	16:30~ 16:40	開 講 の 挨 拶	企画委員長(法学政治学研究科長・ 法学部長)		

\* 止むを得ない事情によりプログラムを変更する場合があります。 (主催:財団法人東京大学総合研究会)



新総長予定者の決定

2000年12月21日に実施された総長選挙で、次  
 期総長予定者として佐々木毅大学院法学政治  
 学研究科教授が選出されました。新総長の任期  
 は、2001年4月1日から4年間です。